

第6章 考察

1 原田古墳の形態・規模

原田古墳は、測量調査の際の所見では径40～47m、地表面からの高さは5.0～6.3mほどの円墳状を呈することが把握されている。

発掘調査の結果、埋葬施設は盗掘を受けていることが明らかになり、それに加えて墳丘周辺は畑の開墾による削平を受けており、正確な規模や形態を把握することは困難である。

一方、埋葬施設を除いた墳丘自体の残りは比較的良好で、墳裾にはアカホヤ面から掘りこまれる段が検出されており、古墳の規模や形態を推測する手がかりとなる。

掘り込みの段は1トレンチ、4トレンチ、7トレンチ、9トレンチ、11トレンチで検出され、11トレンチでは墳裾部に沿って巡ることが確認された。

段はアカホヤ面から掘り込まれ、アカホヤ下面あるいはローム上面で床面に達するが、大きくローム層を削る畑の造成とは異なることから、古墳造成の際の周溝の掘り込みであると認定した。周溝の掘り込みは現状の墳裾に沿ったものであると判断されることから、墳丘の形態は円墳であると推測できる。

一方、4トレンチの墳裾付近では、トレンチ内の段の

ラインが屈曲している。段すなわち周溝の屈曲は北西方向に延びることから、造り出しなどの付属施設があった可能性も捨てきれない。墳丘北西部の8トレンチに周溝に相当する段が検出されていない点も、その可能性を補強するものである。

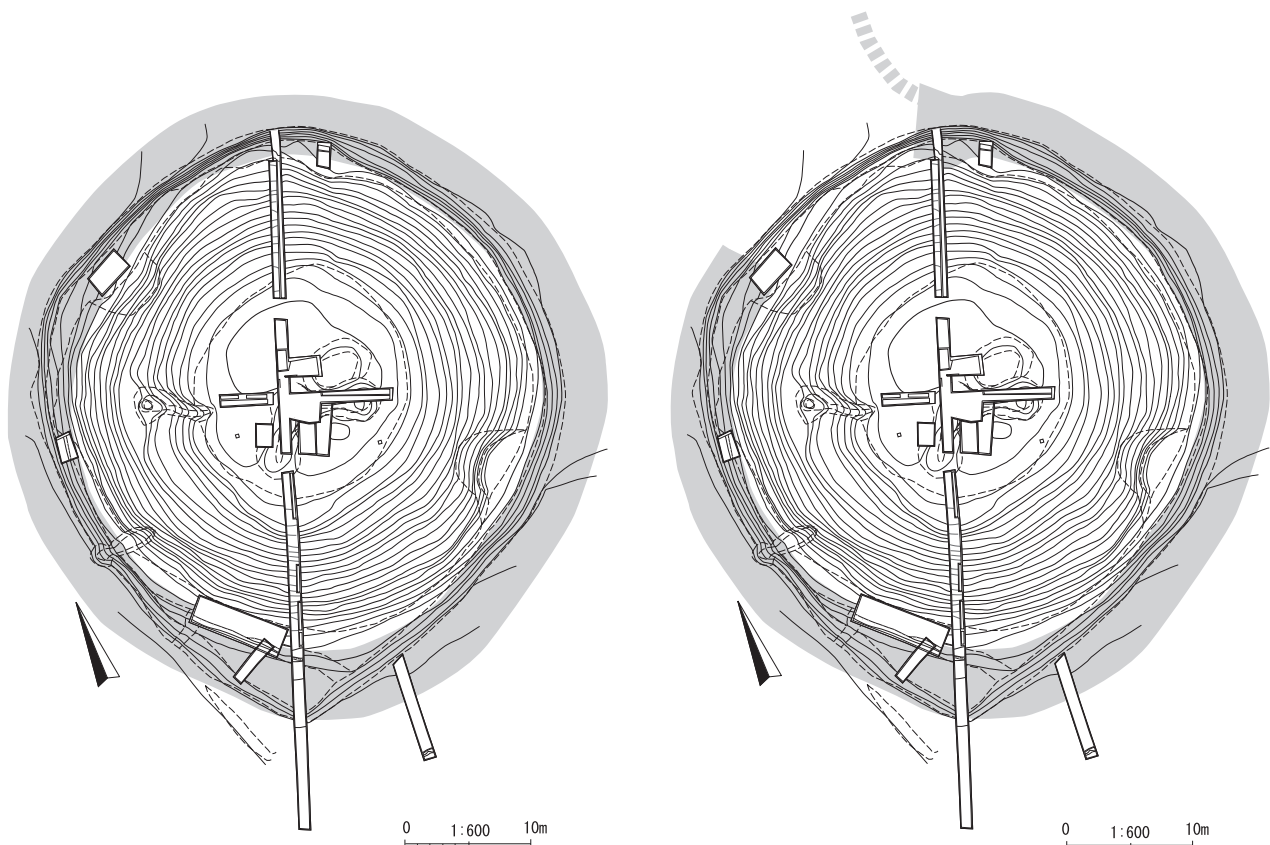
そこで、円墳の復元案、および造り出しなどの付属施設を持つ場合の復元案を示しておく（第51図）。

墳丘の規模は、検出された墳裾の段を周溝とみて基準とすると、径40～45m程度、墳丘高は5.5～6.3mほどの円墳であり、造り出しなど付属施設を持つ可能性も残しておきたい。なお、段築や葺石は認められない。

さらに地下レーダー探査では、原田古墳の周辺に複数の地下式横穴墓が存在する可能性が指摘されている（第5章第1節参照）。墳丘形態や地下式横穴墓との関連を含めて、今後も古墳周辺の調査を継続する必要があるだろう。

2 墳丘盛土の構築法

現在、原田古墳周辺の地形は比較的平坦であるが、1トレンチ南側端部では、アカホヤ層とローム層の境のレベルが58.0mであり、墳丘端部の周溝の段に露出しているアカホヤ層とローム層の境のレベルよりも60cm程度下



第51図 原田古墳墳丘想定図

左：付属施設がない場合

右：付属施設を有する場合

に位置している。

この点から勘案すると、現在茶畑が広がり平坦をなす古墳周辺の地形は、古墳時代には南から北の古墳側に向かって緩やかに上る傾斜が存在していた。古墳南西側には田原川が流れており、河岸から北東へ緩やかに傾斜する地形を利用して、墳丘の構築が行われたと想定される。

墳丘の盛土は、地山のアカホヤ層土やロームブロックを墳丘に含み、堆積する層位の粘性やしまりが異なることから、盛土の構築の方法を検討する手がかりとなる。

埋葬施設の床面付近では、固くしめる黒色粘質土が基盤層となっており、3トレンチや6トレンチ、10トレンチ拡張部、13トレンチの底面付近、および基底部確認トレンチで黒色粘質土が確認されている。

黒色粘質土は、埋葬施設の外側に向かって高く盛り上げられていることが確認され、床面をなす凝灰岩片を含む層が、中心が低くレンズ状に堆積するのは、この黒色粘質土の傾斜によるものであろう。

墳頂部付近の盛土は、黒色粘質土を基盤とし、その上位はアカホヤ層土やロームブロックを含む、粘性としまりのある盛土が積まれている。この粘性としまりのある盛土は、外側と下部に多く、内側に向かって粘性の異なる盛土を充填しているようである。

この点から、墳頂部付近では、外側に土手状に盛土を堆積させた後、内側に充填するという構築法が採られたと推測される。

この墳丘の外側に土手状に盛土を先行して積み、内側に充填する盛土の手順と、黒色粘質土が埋葬施設の基盤をなすことを考えるにあたって、青木敬による墳丘構築法の検討が参考になる（青木 2003）。

青木は、墳丘盛土の構築法として、盛土の方向が墳丘中央部から外表に向かう「外向タイプ」、外表から墳丘中央に向かう「内向タイプ」、水平に盛土する「水平積み」、墳丘外表側に土手のように盛土する「土手状盛土」に大別できるとしている。そして土手状盛土に類似するが、墳丘の中央部のみに構築する「小丘」も提唱している。そのほかに、土手状盛土を構築後、その内側の盛土を行う際に土手状盛土の上端のレベルで平坦面を形成する「平坦面」にも着目している。

原田古墳の盛土の構築は、青木の構築法の検討に依拠すれば、「内向タイプ」「土手状盛土」が採用されたと考えられる。ただし、墳丘保護の観点や調査の時間的な制約から、墳丘の深部まで調査が及んでおらず、墳丘の基底部などの構築技術は不明な点が多い。また墳丘構築にあたっては平坦面が重要となるが、層位観察では平坦面の認識には及んでいない。

推測の域を出ないが、青木の議論に基づく墳丘の構築法が採られたと仮定すると、原田古墳は以下のような手順で墳丘が構築されたと推測したい（第52図）。

①地山（池田降下軽石含有層・アカホヤ層）を整地し、作業空間を確保する。

②基底部の外側にアカホヤ層土やロームのブロックを含む盛土を土手状に構築し、その内側には黒色粘質土の小丘あるいは水平積みを行う。墳丘予定範囲に周溝を巡らせる。

③盛土上端に平坦面を形成し、その上にアカホヤ層土やローム層土を含む土を外側に土手状に盛り上げる。黒色粘質土は、外側を高く盛り上げる。墳頂部の土手状盛土の内側を水平積みで充填する。墳丘外側には、さらに盛土を積み（二次盛土）、土留めの土の間に盛土を充填するなど、傾斜面を整える。

④墓壇を掘削する。埋葬施設を設置し、遺体を埋葬後に封土（水平積み）で上部を覆う。

なお、墳丘上では須恵器や土師器、わずかに鉄器および鉄滓、ガラス玉、滑石製有孔円盤が出土している。10トレンチの墳丘盛土上位から出土した土師器は墳丘構築時の祭祀を示す可能性があるものの、3トレンチや5トレンチ、6トレンチ、10トレンチから出土した遺物の多くは、盗掘や攪乱によって原位置をとどめていないものである。埋葬施設の盗掘は数回行われたことが層位から確認でき、大正3（1914）年の大正火山灰の降下以前だけでなく、火山灰堆積以後にも盗掘や構築物などによって攪乱されたことが推測される。

3 埋葬施設の構造

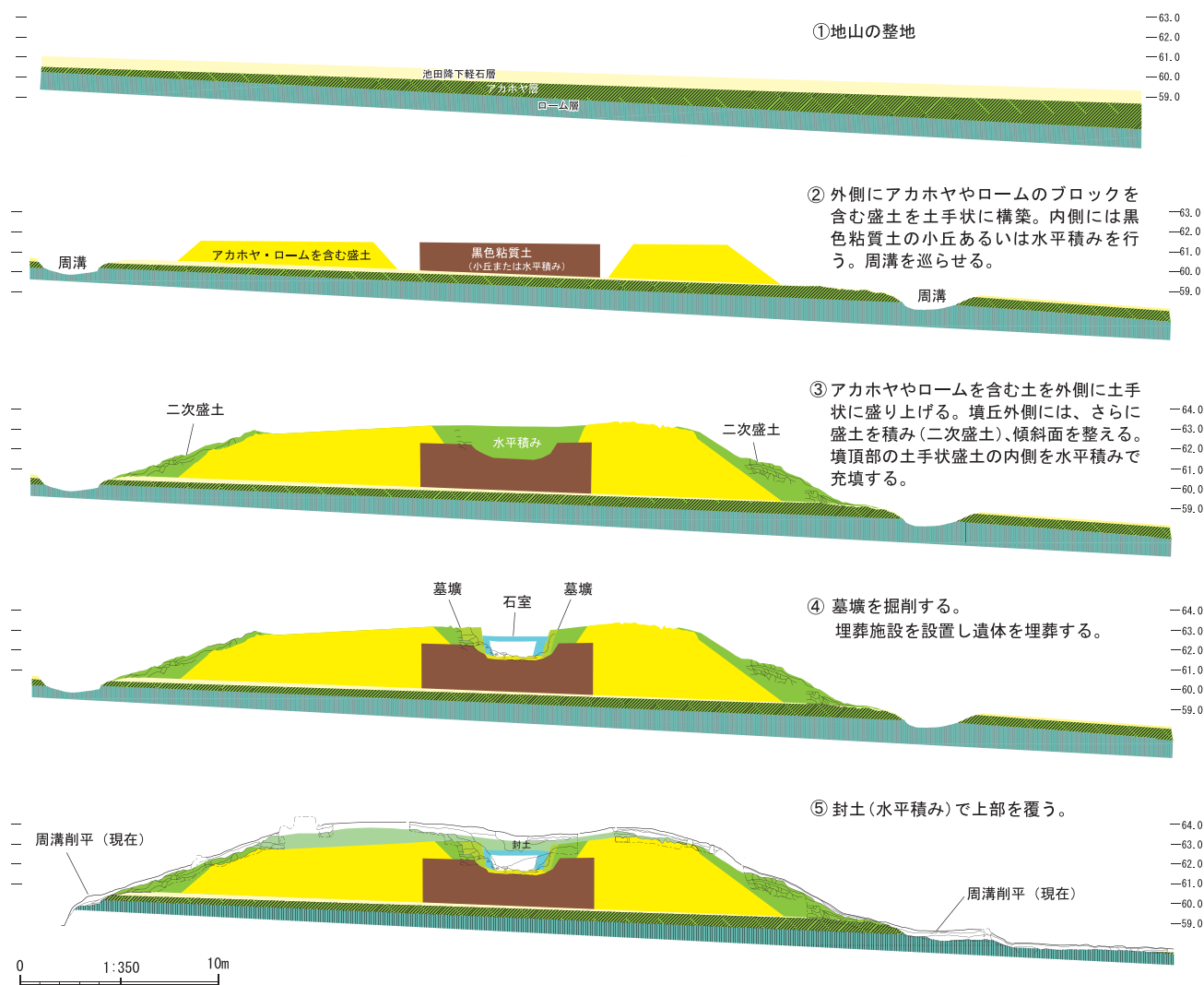
埋葬施設は盗掘にともなう攪乱を受け、詳細な形態や規模を窺い知ることはできない。断片的な手がかりに基づく推論の域を出ないが、原田古墳の埋葬施設の構造について検討してみたい。

墳頂部付近に露出する砂岩製の大型石材は、先述したように石室の天井石に相当し、床面から検出された小型の砂岩製石材は石室の壁材とみられる（石材種の同定については第5章第3節参照）。

埋葬施設の床面に相当するのは、地表面から1.8m程下位の凝灰岩の碎片を多く含む層で、3トレンチおよび6トレンチに面的に広がる（第26図、図版11-2・3）。この凝灰岩片を含む層の上には、石室構築時の原位置を保つとみられる石材が位置していることが、3トレンチおよび6トレンチで確認された。

凝灰岩片は、攪乱された状態で石室壁面を構成する砂岩礫とともに床面上からも出土しており、その中には加工痕を伴うものがみられる（図版16-5~8）。

そこで、凝灰岩片は3号地下式横穴墓と同様に組立式石棺の棺材の可能性が高く、凝灰岩片を含む層は、死者の埋葬に先立って石棺製作のための石材の加工を行い、結果的に埋葬施設の床面として形成されるに至ったこと



第 52 図 原田古墳墳丘構築手順想定図

を示すと考える。

さらに、凝灰岩片を含む層の上に、石室壁を構築したと考えられることから、以下のような埋葬施設の構築手順が復元できる。すなわち、

- ①墳丘構築後、墓壙掘削。
- ②凝灰岩の加工、棺材を製作。
- ③棺材を組み合わせて遺体を埋葬。
- ④砂岩で石室空間を構築。
- ⑤天井石で蓋をして、封土で墓壙を覆う。

この埋葬施設の構築過程は、古墳時代前期の竪穴式石室の構築手順と共通しており（白石 1985）、原田古墳の埋葬施設は、前期の竪穴式石室の技術を踏襲したと考えたい。同様の順序を示すものとして、ほぼ同時期の築造と考えられる大崎町神領 10 号墳において、刳拔式舟形石棺を墓壙内に設置後、軽石でそれを被覆した事例を挙げることができる（橋本 2016）。

墳頂部からは、大型石材が 4 枚確認された。石室の天

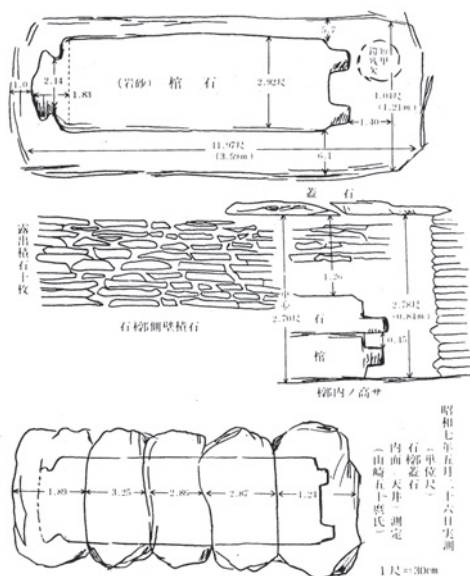
井石は、石室の短辺に架けるように石を置き、それを平行に並べて天井とする場合が一般的である（第 53 図）。しかしながら、見つかった大型石材の長さや厚みは、それぞれ異なり、具体的な設置方法は不明と言わざるを得ない。

埋葬施設の規模については、3 トレンチと 6 トレンチで検出された墓壙のラインや盗掘坑の痕跡から、墓壙範囲は検出面で約 4 ～ 5 m 程度と推定される。

また、石室の構築材として現位置を保っていると考えられる 3 トレンチ北側と南側の石材の距離は、約 2.5 m ほどであり、墓壙検出面からの墓壙ラインの傾斜から推測すると、墓壙底面のサイズは一辺 2 ～ 3 m の範囲に収まるものと考えられる。

仮に墓壙底部の広さを長さ 3 m、幅 2 m と仮定し、その内部に配置する石棺を、長さが墓壙底部長さの 2/3 程度、幅が墓壙底部幅の 1/2 ～ 1/3 程度と見積もると、石棺は長さ 2 m、幅 0.7 ～ 1.0 m 程度のサイズを算出できる。

参考までに、近接して立地する 1 号地下式横穴墓の軽



第 53 図 唐仁大塚古墳の石棺と天井石（中村編 1992 引用）

石製組合式石棺のサイズは長さ約 1.9 m、幅約 0.45 m、3 号地下式横穴墓の軽石製組合式石棺のサイズは長さ 2.5 m、幅 0.6 m である。また、全長 54 m の前方後円墳である大崎町神領 10 号墳の剝貫式舟形石棺は、突起を含む最大長 2.77 m（突起除く 2.42 m）、最大幅 1.28 m（突起除く 0.97 m）ある。

原田古墳が直径約 40 m の円墳であることを考慮すると、妥当な規模の石棺であると言えるかもしれない。

4 志布志湾沿岸地域における原田古墳の位置づけ

原田古墳から出土した遺物の量は少なく、古墳の位置づけについて知る材料は限られるが、出土した須恵器や土師器は築造時期の手掛かりを提供する。

それらは、墳頂部に設けた 3 トレンチの攪乱土坑内、5 トレンチと 6 トレンチ、10 トレンチの表土層等から出土したものが多く、原位置をとどめていないが、墳丘で須恵器や土師器を用いた祭祀が営まれたと推測される。

須恵器はいずれも小破片であるが、器種には甕、壺などがある（第 36・37 図）。須恵器壺の口縁部は、作りが非常にシャープであること、タタキにともなう内面の当て具の痕跡をナデで消していることを特徴として挙げることができる。これらの特徴から、TK216 型式（5 世紀前半代）を中心とする年代が与えられる。原田古墳の築造年代は、5 世紀前半代を中心とする年代が与えられる。

志布志湾沿岸地域の古墳や墳墓で同時期の須恵器が出土する例として、当該地域で最大規模の前方後円墳である大崎町横瀬古墳、同神領古墳群（10 号墳）、肝付町塚崎古墳群（41 号墳）、大崎町下堀地下式横穴墓群などがある。

志布志湾沿岸地域の古墳の多くは、いわゆる高塚墳と

地下式横穴墓からなる群を構成している。原田古墳の周囲には、現在は確認できないものの、造成によって墳丘などの構築物が削平された可能性が高く、かつて複数の古墳が存在したことが指摘されている。複数の古墳群と、地下式横穴墓群とが共存するあり方は、周辺地域の古墳群と共通した築造原理が存在したことをうかがわせる。

近接して造られた 3 号地下式横穴墓は、短甲をはじめ豊富な副葬品を有し、5 世紀末ごろに権力を有した首長がこの地にいたことを示している。それに先立つ原田古墳は、志布志湾沿岸地域の中では最大規模とはいえないものの、その被葬者は旧有明町付近の地域を統括する有力な首長であったのだろう。

原田古墳の被葬者の性格を検討するには、副葬品が手がかりとなる。先述したように原田古墳は大規模な盗掘によって攪乱を受け、副葬品の状況を示す痕跡は失われている。また、攪乱土坑内の埋土についても随時ふりがけを行ったが、埋葬施設からの副葬品類の出土はほぼ皆無であった。

調査を通じて得られた遺物のうち副葬品や供献品と考えられるものは、ガラス玉 1 点、鉄器片 2 点、滑石製有孔円盤 1 点、鉄滓 1 点（ただし、古墳時代のものではない可能性がある）のみである。

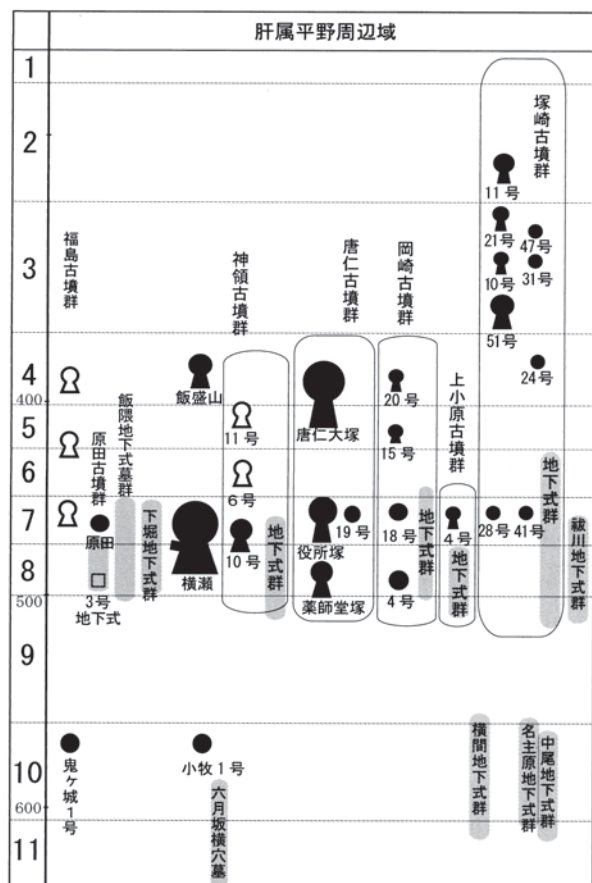
副葬品が盗掘によって徹底的に持ち去られたのか、元来副葬品類が少なかったかのいずれかであるが、現状では副葬品の構成や多寡を議論する材料が不足している。

橋本達也による当該地域の首長墓系譜（第 54 図）によると（橋本編 2021）、横瀬古墳を頂点とする時期に位置づけられる古墳の数は、唐仁大塚を頂点とする前段階より増加している。横瀬古墳と同時期で、規模が横瀬古墳よりも小規模な古墳群は、沿岸部に位置する横瀬・神領古墳群を取り囲むような位置、つまり内陸部に位置する点に注目したい。

横瀬古墳を頂点とする時期の首長墓の数が増すことと、それより下位の古墳群の分布が内陸部に広がることは、横瀬古墳の被葬者が強大な権力を有しており、その統治システムの範囲が、唐仁大塚を頂点とする段階よりも拡大したとみることもできるのではなかろうか。

原田古墳が造られた旧有明町周辺地域は、5 世紀前半頃横瀬古墳群を頂点とする統治システムに組み込まれるようになった。原田古墳の被葬者は、統治システムを担いサポートした人物であったと推測したい。

また原田古墳の石棺の石材に関して、分析の結果、神領 10 号墳と同じ入戸火砕流の凝灰岩を使用した点も注目される。横瀬古墳を頂点とする統治システムの構成員間には、棺の石材の共有など緊密な関係が存在したことを示唆しており、原田古墳の被葬者は、婚姻や血縁関係、埋葬に関わる物資のやりとりなどを通じて、志布志湾沿岸域の有力者層と緊密な関係を築いた人物であるとみる



特に編年根拠の弱いもの

第54図 肝属平野周辺域における首長墓系譜（橋本2021引用）

ことができるのではなかろうか。

【引用・参考文献】

- 青木敬 2003『古墳築造の研究—墳丘からみた古墳の地域性—』六一書房
- 大西智和・鐘ヶ江賢二・松崎大嗣 2012「志布志市有明町原田古墳の測量調査」『鹿児島考古』42 鹿児島県考古学会
- 大西智和・鐘ヶ江賢二・松崎大嗣 2013「志布志市有明町原田古墳の発掘調査（速報）」『鹿児島考古』43 鹿児島県考古学会
- 大西智和・鐘ヶ江賢二・相美伊久雄 2014「志布志市有明町原田古墳の発掘調査（2次調査速報）」『鹿児島考古』44 鹿児島県考古学会
- 白石太一郎 1985『古墳の知識Ⅰ 墳丘と内部構造』東京美術
- 中村耕治編 1992『唐仁古墳群—1号墳（大塚古墳）の墳丘測量—』東串良町埋蔵文化財調査報告書（1）東串良町教育委員会
- 橋本達也 2016『大隅大崎神領10号墳の研究Ⅰ』鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No. 9 鹿児島大学総合研究博物館
- 橋本達也・中久保辰夫・中辻慧太・甲斐康大・坂本稔・上野祥史 2021『大隅大崎神領10号墳の研究Ⅱ』鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No. 15 鹿児島大学総合研究博物館

第7章 小結

原田古墳の6次にわたる調査により、古墳の正確な規模やその構造、埋葬施設の現状とその構造、墳丘構築方法、そして築造年代などを明らかにすることができた。その詳細は第6章に譲るとして、本章では出土遺物について少し触れておきたい。

調査では、須恵器や土師器、ガラス玉、滑石製有孔円板、鉄製品、鉄滓が確認された。これらは表土や盗掘坑、攪乱後に堆積した地層から見つかったものであり、原位置を留めているものではない。

須恵器の甕・壺や土師器の高坏・小型壺・小型丸底壺は、古墳祭祀に用いられたものであろう。墳丘盛土上位から出土した土師器高坏の脚端部には、意図的な打ち欠きも認められる。

土師器は、小片が多く、時期比定は困難である。一方で、須恵器はその特徴からTK 216型式に比定可能で、5世紀前半代（5世紀中頃）に位置づけられそうである。橋本達也氏によると、格子状タタキをもつ個体（19～23）はその特徴から市場南組窯系須恵器とみられるとのことである。

ガラス玉は、径0.3 cm以下のいわゆる「粟玉」である（富樫2003）。玉の表面は滑らかに仕上げられており、引き伸ばし法により製作された可能性もあろう。分析によると、ソーダ石灰ガラスの可能性が指摘されている（第5章第2節参照）。また、元素として銅が検出されており、そのために赤褐色を呈しているとみられる。

滑石製有孔円板は、集成編年6期に出現するとされている（清喜2013）。原田古墳は7期に位置づけられることから、その年代に矛盾はない。

鉄製品は鉄鏃の可能性もあるものの、小片であり、詳細は不明である。鉄滓も出土しているが、古墳時代のものではない可能性も有り得る。

ガラス玉や滑石製有孔円板、鉄製品等は副葬品とみられるものの、数が少ないために副葬品の組成等について言及することは難しい。

なお、古墳時代のものではない土師器坏も出土している。その器形や外底面のヘラ切り痕から古代に属すると考えるが、より詳細な年代比定は難しい。これらは祭祀土器的な色彩が強いものと考えられ、古代においても原田古墳は祭祀を行う場であったのだろう。

【引用・参考文献】

- 鈴木恵介・堀木真美子 2015「古墳時代後期ガラス小玉の製作技法」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』16
- 清喜裕二 2013「滑石製品」『古墳時代の考古学』4 同成社
- 富樫雅彦 2003「弥生・古墳時代のガラス」『考古資料大観』6 小学館